

よみがえれ地方語

◎12◎

船津 好明

沖縄の実用地方語の活字表記

⑤

まず、参考のために前回掲載した沖縄語文の国語訳を直訳調で表してみる。以下は、沖縄語辞典の二十二頁からの引用である。

「皆様、これから沖縄の昔話を沖縄弁でお話ししてはと思っております。

昔、首里にあった話ですが、大層美しい女を妻にしている人がいました。妻があまりきれいなので、夫はこの妻がもしかよそに引かれることがないかしらと、朝も晩もいつも心配ばかりしていました。あまり心配してしまいました。この夫は重い病気にかかって次第に弱って、もはや今日か明日かというほど危くなりましたので、妻に向って「もう私はとても危ない。お前は私が死んでしまえば、また、夫を持つだろうな。」と言いました。するとこの妻が言うには「私はここ(夫のところ)に来た以上はこここそが死に所(です)、ここより他はどこにも行きません。あなたはつまらない心配をなさらないで、早く丈

夫におなりになるようなさいませ。」と言いました。ですが、この夫は「妻がそう言ったところで、自分が死ねばどうなっていくか解らない。ああ残念、死んでも死にきれない。」と言って涙なども落とす様子でした。するとこの妻は「あなたがそれほど心配なさるなら、私の覚悟をお目にかけてまじう。」と言って台所から包丁を持ってきて、自分の鼻を切って見せました。この妻は容姿も人に勝り、たち勝って美しかったのですが、心もまた大変立派に持っている女でした。……」

次に先の沖縄語の例文における漢字の使い方についての考え方を説明する。

漢字の用い方は、現在のよう沖縄語の組織教育がなされていない段階では、これまでの慣用および国語の表記との関連が円滑になるように特に配慮し、過度な当て字は避けた。先の例文の表記が模範的なものかどうか解らないが、要点は次のとおりである。

(1) 沖縄語のうちで、その発音が同意または類意の国語の発音と音声学上関連がある比較的容易に思われるものについては、適宜漢字を用いることとした。たとえば、

んかし——昔
ちゅー——今日
ほーチャー——包丁

(2) 人名、地名等の固有名詞における漢字はそのまま用いることとするが、従来沖縄語として散見されるその他の漢字は、過度の当て字かどうか注意し、過度の当て字とは思われぬ場合には使ってもよいこととした。しかし、過度の当て字かどうかの判断はなかなか難しく、前記の例文では筆者の感覚的判断が多分に入っている。たとえば「るきが」を「男」と表すのを認め、「ちむ」を「心」と表すのは認めないなどは、判然とした論旨に基づいているわけではない。一般に、沖縄語にそれと同意または類意の国語の漢字を当てるのは慎重であるべきで、そう

しないと、「しゅむち」を「本」、「どー」を「自分」、「まきむい」を「結納」と表すなど、当て字が際限なく氾濫することになる。

(3) 活用語の語幹に漢字を用いたときは、その語が活用によって発音が変わったとしても同じ漢字を用いることとした。たとえば、いちゅん——行ちゅん
んじ——行じ

(4) 助詞には原則として漢字を用いないこととした。たとえば沖縄語の「くと」は助詞として使われるときは平仮名のままとし、名詞として使われるときは「事」を用いてもよいこととした。

以上、主な点を説明したが、今後は、沖縄語の散文体の発展のため、漢字の採用基準などの問題について、ちようと国語に国語審議会があるように、沖縄語の識者が集まって沖縄語審議会のようなものを組織して、統一見解と事例集を作っていくのが望ましい。